

## 対人援助論からの保育試論(2) —グループワークとしての保育に関する一考察—

市 東 賢 二  
Shito Kenji

### 要 約

保育における直接援助技術は、個別援助技術としてのケースワークと集団援助技術としてのグループワークに大別して捉えることができる。保育を学ぶものにとって、保育とケースワーク及びグループワークを、結びつけて概念化させることに馴染まないかもしれない。しかし、人間は一人であると同時に周りの人間と共に生きている。こうした存在論的事実をオランダの哲学者クワント, R. C. は社会的事実性 (social facticity) として概念化した。このことは、ある人は必ずいずれかの文化や社会に所属し、影響を受けている。当然特定の誰かが存在しない文化や社会そのものなどありえない。こうした方法論的吟味から援助技術としてのグループワークを捉え返し、テクニックとしてのグループワークから人間の社会的生を支える方法論の一部としてのグループワークを再認識する必要がある。

キーワード：社会的事実性、ケースワークとグループワーク、体験としてのグループ

### はじめに

保育現場で行われるさまざまな保育の中に、個別的な保育もしくは集団に対する保育と呼ばれている保育がある。当然別々の場面としてそれらがある訳でなく、同じ保育現場の同じ場面に両面としての保育があるといってもよいだろう。しかし、これら二つの保育はそれぞれがどのように位置付けられ、どのように関係しているかは定かにされていない。本論においてはこれら二つのかかわりを特にグループワークという視点から考察しようとするものである。

従来社会福祉学の領域において個別的な援助をケースワーク、集団的な援助をグループワークと呼ぶことが多い。このケースワークとグループワークの両者のつながりや関連を述べたものは多くないが、対人援助を論ずる上では、両者の関係を明らかにする必要があるろうし、そうしたことは保育という場においても重要な意味を持つと思われる。しかしながら保育を学ぶも

のにとって、特に学生は、なかなか保育とケースワーク及びグループワークを、結びつけて概念化させることに馴染まないかもしれない。

当然のことながら、保育を含めた対人援助の専門職にとって対人援助はケース・バイ・ケースであり、同一のケースなどはありえない。そうした中で、保育者－乳幼児または保護者といった個別援助をケースワーク、保育者－乳幼児集団または家庭・地域といった集団援助をグループワークとして概念化するということには意味がある。それは、その場その場の場当たりのなものになってしまいかねない個々の援助を、全体性を問い返すことである。同時に、援助者自身の援助への態度を問い返すことでもあるだろう。

個人と集団との関係は、個人を中心に考えれば、個人が集まった状態が集団であり(=集合)、集団を中心に考えれば集団の中身を細かくしていけば個人となる(=個体)とも理解できる。しかし、こうした理解はそもそも個人あるいは集団を、それぞれそのものとして仮定し、そこから対象を規定しようとするものである。しかし人間は一人であると同時に周りの人間と生きている。こうした現実をオランダの哲学者クワント, R. C. は社会的事実性 (social facticity) として概念化した<sup>\*1</sup>。このことは、われわれの生きている現実を事実として捉えれば、ある人は必ずいずれかの文化や社会に所属し、影響を受けている。また、当然特定の誰かが存在しない文化や社会そのものなどありえない。ほかに、例えば人が時にため息とともに漏らす「人は一人では生きていない」「人は一人で生きている」といった言葉にもそれは表れる。これらのことは人がある出来事に直面したときに、あるときは周りの人に助けられ、またあるときは周りの人から裏切られる、そうしたときに漏れる心情的な言葉であろう。そういう意味で、前者と後者は相反する言葉である。しかし、そのある人が生きる現実を捉えたとき、どちらにしても周りに必ず人がいるということが見えてくる。その現実をプラスの感情として捉えれば前者が、マイナスの感情として捉えれば後者が出てくるのであろう。この特定の誰かの周りには必ずほかに人がいるという現実、援助技術を捉える際に、踏まえる必要のある存在論的事実であるといえるだろう。

## 1 ケースワークとグループワークの位置付け

本論において、まず確認することは、ケースワーク(個別援助)とグループワーク(集団援助)との関係そのものである。この両者の関係は対人援助論においてはケースワークが第一義的援助であり、グループワークが第二義的援助であるといったような関係ではありえない。こうした理解の仕方は、端的に言えば援助者側の目の届きやすさという、きわめて援助者中心主義的な理解である。むしろ本来的には両者の関係は相互的な関係である。こうした関係は、対人援助論における個人と集団を存在論的に捉えることから理解できよう。

社会福祉援助技術におけるケースワークとグループワーク相関性について見てみよう。例えば、ミネルヴァ書房から刊行されている『現代の保育学2 社会福祉の方法と実際』によれば「第

1部 基礎編」において社会福祉援助技術の体系として直接援助技術として展開される中に個別援助技術（ソーシャル・ケースワーク）と集団援助技術（ソーシャル・グループワーク）を並列的に述べている。その中で大塚は「ケースワークはワーカーとクライアントの1対1の対人関係が基本となって展開」され「グループワークでは、個々のメンバーと個別にかかわりをもとうとするのではなく、グループ全体を対象として…略…グループとしての体験の場をつくることで個人の成長を援助」（同上 p.33）するものとして取り上げている。さらにこれら二つの援助技術は別々の技術ではなく密接な関係にあることを述べている。

こうした両者の取扱いはほぼ一般的な取扱いであり、それぞれを並列した一つの社会福祉援助技術として述べることが多いようである。こうした取扱いは、対人援助にかかわる専門職者が身につける技術としてケースワークとグループワークがあるという以外に関連性を見出せない。精々が、大塚も述べるように両者には「密接な関係」があることを明示するにとどまっている。当然上記に挙げたように保育にかかわらず援助技術が用いられる現場の実際は、ケース・バイ・ケースであるから、その一つ一つについて具体的な密接さを取り上げることはできない。そうであればこそ、その密接さの意味を考えておくことも必要ではないか。

これら二つの援助技術の関係を上げる際に一つのヒントがある。それは慣習的な記載方法であることを考慮しても、なぜケースワークとグループワークの記載順序は一定しているのであろうかということである。このことは一つには偶然であるというよりはその言葉遣いの慣例によるものであると考えられる。それはケースワークという言葉遣いの問題である。従来社会福祉援助技術はソーシャル・ワークもしくはソーシャル・ケースワークと用いられてきている。この言葉の意味はリッチモンドの有名な定義によれば「ソーシャル・ケース・ワークは人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている」（小松訳 p.57）技術のことである。つまりもともとの意味は個別か集団かという区別によって用いられた言葉ではないのは周知の通りである。しかしながら、ここから生じた誤解がケースワーク研究を発展させたのであり、グループワークとの区別を生んだと言えるだろう。あくまでもここでリッチモンドが定義したソーシャル・ケース・ワークは社会における個人に対する意図的な調整を問題にしているのであって、その技術や方法が個別的であるか集団的であるかは意図していない。そうでありながら、個別援助を念頭においたケースワークが援助技術研究として盛んになっていきグループワーク研究とどのような違いをもったかといったあたりの歴史的背景については後述するが、社会福祉援助技術としては個人を対象とした援助技術が先行したと無関係ではないようである。

ケースワークとグループワークを技術や方法として取り上げる際には前述した通り、社会福祉援助技術の一つとしてコミュニティワークや社会調査法とともにその技術の概略を述べようとするのもその一つのやり方であると考えられる。しかしこのやり方はそれぞれの技術を、ケースワークならその対象を個人に、グループワークなら集団に、といった具合に対象や領域別に扱おうとすることは「『領域としての発想』の落とし穴」（足立叡他 p.22）にはまってしまうことになる。さらに佐藤が「生活者としての人間の社会的生命を守り、その社会的機能を増進

させることは、どの方法をとっても共通なことである」(同上)と続ける通り、ケースワークであれグループワークであれ、方法論的な揺らぎのないことが求められている。つまり、個人と集団・社会との関係の両義性を見据え理解することが求められていると言えるだろう。ケースワークとグループワークが、ともに社会福祉援助技術の中で直接援助技術として位置付けられていることの意味は、有り体にいってしまえば、一枚のコインの裏表のようなことであると言えるだろう。逆に一枚のコインというための方法論的吟味がここで必要とされているとも言えるだろう。

## 2 集団援助技術としてのグループワーク

グループワークの方法論的吟味に入る前に簡略にはあるが、グループワークの成り立ちを見直しておこう。集団援助技術の発展は19世紀なかばから20世紀初めにかけてのYMCAやYWCAの活動に見られるような、青少年による小集団への自発的な参加による活動において、環境の改善や人格の成長を促すこととして行われたものが代表的である。またさらに19世紀後半に「トインビー・ホール」で始まったセツルメント運動もまたグループワークを語るうえでは見逃せないものである。セツルメント運動は主に貧困を対象として発展したが、個人を取り巻く環境の改善に重点をおいたことから、今日のグループワークに環境が人に与える影響の大きさの認識や社会参加の重要性などを残したと言えるだろう。

歴史的な背景の中でグループワークは、社会教育やレクリエーションと結びついていたために援助技術としては異質なものと見られがちであった。しかしながら1930年代以降G. E. メイヨーらによるホーソン実験やJ. L. モレノ、K. レヴィンらによって小集団活動における人間関係の重要性やグループワークのプロセスの意義の重要性が認められるようになっていった。そうしてソーシャルワークに対比する用語としてグループワークという言葉も使われるようになっていった。さらに40代に入ると治療グループワークが台頭し、グループワーカーの積極的な介入と小集団の持つダイナミズムが治療の手段及び環境として効果的であることが認められ、その実践的な領域を広げていった。グループワークの定義としてはG. コノプカの「ソーシャル・グループ・ワークとは、ソーシャルワークの一つの方法であり、意図的なグループ経験を通じて、個人の社会的に機能する力を高め、また個人、集団、地域社会の諸問題に、より効果的に対処しよう、人々を援助するものである」(前田ケイ訳 p.17)というものが有名である。

現在のグループワークとは、その定義として例えばR. W. トーズランドとR. F. ライバスによる「治療を伴う目標志向的な治療グループと、社会・心理的ニーズとそのニーズの充足に向けての課題を達成することを目指した課題グループ。これらのグループ活動では、グループ一人ひとりのメンバーと、サービス提供システムとしてのグループ全体に焦点が当てられている。」(野村豊子監訳 p.16)といったものがある。この中で彼等は小集団の定義を「メンバー

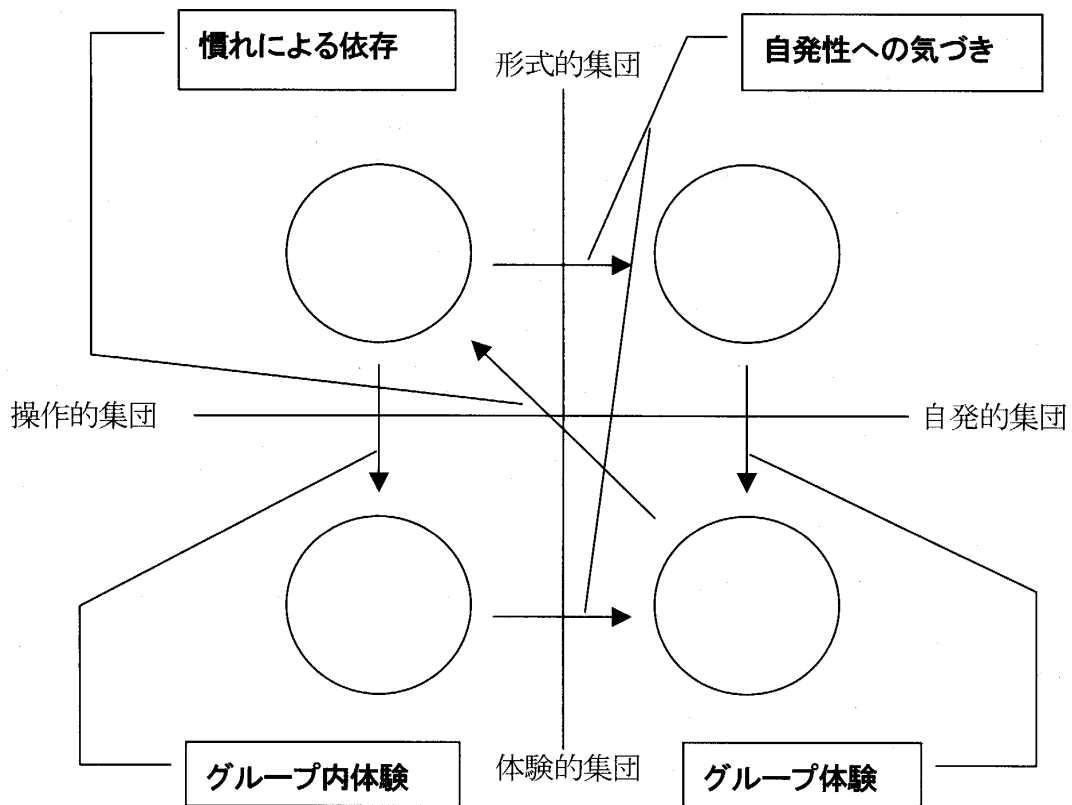
として自分たちを同一化し、相互に作用し合い、そして言語的、非言語的コミュニケーション課程を通して、メンバー間で自分たちの考えと感情を交換し合えるようなメンバーの活動」(同上 p.16) としている。さらに「グループは空虚に存在しているものではない」(同上 p. 17) としながら、「グループは、グループの目的、その目的を正当化したり、グループに影響を与えている地域との関係や現存するサービス提供体制との関係のうえで存在している」(同上) と定義付けている。

こうしたグループワークの定義は必ずしも特定場面におけるグループの活動のみを意味している訳ではない。当然のことながら様々な社会福祉援助場面における援助技術として用いられることを目指しているが、その根元的な視点において「人はひとりでは生きていない」ということがある。これは人間が生きていくということは現実的に様々なグループに所属しながら生き、生活しており、それをできうる限り避けながら生活する人もいるが、人は社会(集団)生活を生きるという視点がある。つまりそれが、専門的な援助場面であれば、そこにかかわる専門家が自覚しようがしていなかろうが、集団にかかわる専門家はグループワーカーとしての責任があるといっても過言ではないのである。

### 3 方法論としてのグループワーク

対人援助を方法論的に捉え返す一つの試みは、そこで用いられる技術自体を問い返すこととして見出すことができる。それは援助技術が technique であるか art であるか<sup>\*ii</sup>をもう一度捉え返し、技術そのものに根ざす態度の問題として捉えることである。ここで用いられるグループワークが technique であるか art であるかを問い返す必要が生じる。この technique であるか art であるかという問題は、グループをどのように捉えるのかということにもよってくる。それは、グループを形式的に捉えるのか体験として捉えるのかということがまずあげられる。グループはどのようなものであれ、基本的にダイナミズムをもっているから、当然そこでは様々な動きがある。しかしそうしたダイナミズムを操作的に起こすのか、自発性に任せるのかによってグループ自体に大きく影響することになる。下の図はグループの意味とダイナミズムを図にしようと試みたものであるが、グループが方法論的に問題とされる場合、その主題はほぼグループにおける体験の意味である。もちろんグループを構成的に見ることもできる。それは例えば教室や保育室、またはある目的に即して集められた集団を見た場合である。

体験としての集団と形式としての集団の相関図



構成的にグループを見ようとすれば、それは一見無作為に区切られた人々の集まりであることもあれば、特定の条件に即して区切られた人々の集まりであることもある。この場合、そのグループがどのように構成されたグループなのかが問題になっており、ここで用いられるグループという言葉は単純に人々の集合という以上の意味をもたない。学問的なバックグラウンドはともかくとして、そこではどのような体験も基本的には問題にされず、問題にされたとしても二次的な問題となってしまう。つまり、グループに起こるダイナミズムは根本的に問うことができないのである。

その対極として、グループそのものをプロセスとして見ていくことができる。つまり形式的もしくは出来合いのものとしてグループを捉えるのではなく、個人と集団との体験に焦点を当てていくということである。当然ここではどのような人々の集まりであれ、そこに参加する人々が「グループになる」ということが問題となるのである<sup>\*)</sup>。この「グループになる」ということを問題にする場合、そのグループへの働きかけが大きな問題となる。それは保育場面を例に取れば、保育者と乳幼児との関係に見ることができるだろう。実際の保育場面においては保育者と乳幼児の関係がどのようになっているのかということを一括りにして述べることは、危険以外の何ものでもないことは明らかである。しかしながら、そのケース・バイ・ケースの保育場面において保育者の集団へのかかわる態度によって大別することができるだろう。それが保育者の操作的な態度であるか自発的な態度であるかである。重ねていうがケース・バイ・ケースの保育場面において、保育者は保育対象である乳幼児に対して操作的にかかわる場合も

あれば、自発的にかかわる場合もある。その意味でいえば、個々の場面に応じたハウ・ツーとしてのかかわりの方法や技術が問題なのではなく保育者自身の態度をここでは問題にするのである。つまり保育者のかかわりによって乳幼児の集団をグループにするべくかかわろうとすれば、当然そこで手段的に自発性を用いたとしても操作的なかかわりであることに違いはない。操作的集団であるか自発的集団であるかのダイナミズムは、上の図に表したようにそのグループの構成員自身の自発性への気づきである。ここでいう自発性とは、ともすれば「やる気」といった言葉と混同されがちであるが、意味内容は全く違うと断言していいだろう。確かに保育という領域においては、幼稚園教育要領や保育所保育指針を引き合いに出すまでもなく乳幼児の主体性や自由、自主性を重んじている。しかしこれらの言葉が、単に特定個人の満足感や能力向上のみを意味するとすれば、人間の社会的生において重大な見落としをすることになる。グループのプロセスからすれば、確かに特定個人の満足感や能力向上は操作的態度からかかわろうとする保育者にとっては、とても使い勝手のよいグループ操作手段になりうるだろう。しかしながらそこで手段的に用いられる特定個人は、保育者の操作するグループ内においてのみ満足感が得られ、能力向上を自らの原動力にできる。つまり保育者によって閉ざされたグループ内でのみそうした体験ができるのである。主体性への気づきとは、個人主義的な閉ざされたやる気の喚起ではない。むしろ社会的事実性を生きる人間としての自己のありようへの開かれた気づきであると言えるだろう。同様に形式的な集団が操作的に体験としての集団になっていくダイナミズムを上図ではグループ内体験として表現している。ここでいうグループ体験とグループ内体験の違いは、当然社会的事実性を生きる人間としての自己のありようへの気づきにある。これはグループを論ずる時に用いられる閉じられたグループか開かれたグループかといった問題提起に通じるものである。閉じられたグループなのか開かれたグループなのかの根本的な違いは、まさしくこのグループ体験とグループ内体験の違いにあるのだが、これら二つのグループにおいて起こる体験の違いについて早坂は「すべてグループ内体験であることは当然だが、そこでの体験がほんとうのグループ体験であるかどうかは、まったく別のことなのだ。…略…すなわちメンバー相互間にどんなに相互作用が成り立っており、仮に、そと目には共通の目標が成立しているようにみえても、それが相互性（おたがいのために）という、メンバー同士の感情や気持ちの交流の結果でないかぎり、いいかえれば時間とともに動く感情や気持ちがそのまま共同体験されるのでないかぎり、グループはグループでない」（早坂 pp. 121-123）と述べる。つまり、グループが構成され、そこに参加する人々が某かの体験をするという意味では、一人ひとりに焦点を当てればその個人にとっては、主観的なグループ内体験であることは間違いのない。これら二つの体験の違いは、まさしくその体験があくまでも個人に還元され個人にとどまる体験であるのか、グループの参加者同士の相互性や時間の共有の体験であるのかということにある。

#### 4 グループワークからの保育援助技術

ここまで述べた上で、残った疑問を明らかにしよう。第1節で見た大塚のケースワークとグループワークの関連づけをもう一度見てみよう。大塚は「ケースワークはワーカーとクライアントの1対1の対人関係が基本となって展開」され「グループワークでは、個々のメンバーと個別にかかわりをもとうとするのではなく、グループ全体を対象として…略…グループとしての体験の場をつくることで個人の成長を援助」(前出 p.33) するものとしている。確かにそれ以前の頁でケースワークとは「社会生活上の諸問題に直面して困難な状況におちいつている個人または家族に対して、その困難な状況から脱出できるよう個別的に援助していく過程である」(前出 p.17) と述べ、グループワークについてはコノプカの定義を引用しそれぞれの違いを述べているが、ここに注目すべき点がある。それは、どちらの方法も最終的にある個別の対象についての働きかけを目的としているということである。こうしたケースワークとグループワークの捉え方は大塚が目立って特徴的なとらえ方をしているとは思えない。むしろ一般的なたらえ方をしているといってもいいだろう。その意味では個別な援助を目的としたケースワークのみならず、グループワークですらその目的が最終的に個人に還元されてしまうのではないかということである。この意味で捉えるならば、グループワークはあくまでもケースワークの延長としての、その応用としての援助技術でしかあり得ないことになる。

しかしながらはじめに触れたようにわれわれの生は、本来的に個別的であるより社会的である。そうした社会的生への援助はどのようにして成り立っているのだろうか。近代以降現代においてわれわれは、自然的態度としての個人主義的傾向を強くもっている。このことは知らず知らずの内にわれわれがする個別的な対応に親和性をもっていることを表してもいる。これを援助技術に当てはめてみれば、当然のようにわれわれはまずケースワークを修得しようとし、その技術を発展的に集団へと適用しようとする。つまりケースワークの応用としてのグループワーク技術を修得しようとする。こうして修得した技術は当然ながら個別援助としてのかかわりを基盤としているから、個別な体験をもとにしたグループ内体験を基盤とすることになるから、他者とのかかわり自体や相互性といったグループ体験は本来的な体験ではあり得ない。

こうしたことを見直そうとすれば、先にも述べた保育者の態度が問題にされてしまうことになる。集団へのかかわりとしてのグループワークを単なる technique としてしか捉えることができなければ、保育の直接援助技術におけるグループワークは、あくまでも二次的な技術にすぎず、いってみれば保育者として熟練したものが用いる技術として捉えられる。しかしながら保育の対象となる乳幼児は一人の人間である。このあたりまえのようなことから出発すれば、乳幼児の社会的生や実際の保育現場で見られる集団生活は決して二次的なものではない。むしろ昨今焦点の当てられる家庭や親子関係の問題や地域社会の問題の根底は、まさしく人間の社会的生を捉え返すことを要求している。つまり上記に述べてきたことを保育における援助技術として捉え返すならば、保育者はグループワーカーである必要があると言えるだろう。保育援助技術としてグループへのかかわりが必要であることは、その個々の援助技術がつねに社会性



や相互性に働きかけるものであることはもちろんである。それ以上に何よりも保育者自身が保育現場という集団に参加するメンバーでありながら、専門職としての保育者でもあるということを知覚する必要があるということである。先に挙げた集団のダイナミズムからすれば、保育者は乳幼児たちとは別格の存在として、乳幼児たちを主体的に操作することが求められているのではなく、保育者は乳幼児たちとかかわりながら主体的に気づくことが求められている。乳幼児たちに期待する社会的生への気づきや相互性の体験は、保育者自身にも要求されていることを、再度自覚する必要があるだろう。こうした集団へのかかわりの捉え返しは、単なる概念的な問題ではなく、じつはかなり重要な問題をはらんでいるのである。先にわれわれは自然的態度として個人主義的傾向を強くもっているとしたが、このことはケースワーク→グループワークという援助技術を修得する保育者自身にとってはとても心地よい。しかしすでに自らの自覚と自己意識を信じているわれわれにとっては、個体的個人へのかかわりからそれぞれの個人を関係付けようとする流れはいかにも自然に見える。しかし様々な研究者や実践家が人間の発達を研究した緒論において人間はそもそも社会的に発達することが明らかにされている。つまり自然的態度としてのわれわれの心地よさは、極端に言えば乳幼児の社会的生を個体的個人へと切断するところから始まるのである。それをもう一度保育者自身が社会的生を生きる一人の人間としてのかかわりを自覚することから始まる。それはグループワークとしての保育援助技術として修得することにおいて、はじめて個別的援助が個体的個人へのかかわりから関係的個人へのかかわりへの援助技術として明確化されるだろう。人間的生が社会的でありながら個別的であることの意味が、観念的な問題としてのみならず具体的な対人援助の問題として現実化する援助技術としてグループワークを捉え返す必要があると言えるだろう。

## 注釈

- i R. C. クワントはその著『人間と社会の現象学』（早坂泰次郎監訳 勁草書房 1984）のなかで人間存在の社会的次元について、それが協調され過ぎることによって、それが社会的決定論やひいてはイデオロギーとしての集団の絶対化が引き起こされることや、人間が個人的に行なう仲間との交際の時の行動においても強い影響力をもつことに触れつつ、それを事実性として概念化する。クワントのいう社会的事実性とは、われわれ人間はそれぞれ一人ひとりが他者を通じた存在であることを支えており、「社会的事実性は人間を現実化するが、それ自身は人間によって現実化される」（同上 p. 88）ようなことである。
- ii 拙著「第3章 人間援助技術としてのソーシャルワークの発展に向けて」（『ソーシャルワークとケアワーク』大和田猛編著 中央法規 2004）参照
- iii この「グループになる」という体験について早坂泰次郎は『人間関係の心理学』の中でグループになるという体験についてグループ体験とグループ内体験とを区別する。この体験はどちらも主観的であるが、根本的な違いはその体験が「相互主観的ないし協働主観的なのであり、その意味では

客観的」(同上 p.125)なことである。つまり相関図にそっていえば、自発性への気づきがグループへの客観的な体験として開かれていく体験と、体験そのものを個人的私的に閉ざされた主観主義的なことがらとして、グループの中でのみ操作的に体験されるグループ内体験とに区別される必要があるだろう。

#### 引用参考文献

- 足立 叡 佐藤俊一 平岡蕃共編 『ソーシャル・ケースワーク』 中央法規 1996  
G. コノプカ著 『ソーシャル・グループ・ワーク』 前田ケイ訳 全国社会福祉協議会 1967  
早坂泰次郎著 『人間関係の心理学』 講談社現代新書 1979  
早坂泰次郎著 『人間関係学序説』  
M. E. リッチモンド著 『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』 小松源助訳 中央法規 1991  
大塚達雄 澤田健次郎編 『現代の保育学2 社会福祉の方法と実際』 ミネルヴァ書房 2002  
R. C. クワント著 『人間と社会の現象学』 早坂泰次郎監訳  
ロナルド・W・トーズランド/ロバート・F・ライバス著 『グループワーク入門 あらゆる場で役にたつアイデアと活用法』 野村豊子監訳 中央法規 2003  
福祉士養成講座編集委員会編集 『介護福祉士養成講座5 社会福祉援助技術』 中央法規